

——週に2回ペースかな

——いつも、この店で

——1人だから、気楽だね

主人は、高倉健同様に無口だ。X氏は、主人の声を上手く思いだせない。何度か聞いた記憶はあるが、他人の声と比較できないほどだ。夫婦でやっているのか、女は、岸田今日子に似て、声の美しい、よく働く、しっかり者だ。夫婦らしい呼吸だけで動いている店で、注文から支払いまで、実に間がいい。

——だいたい人は、猫派か犬派に大別されると思うけど、犬に噛まれたあなたが犬派であるはずはないし、かと言って猫派とも思えないわ

——どちらでもないね

——生きものが嫌いみたいね

——どうして?

——そこの石みたいな表情しているわ

——それは、少々、ひどいね

——好きな生物は?

——鳥

——野鳥ね

——そういうのじゃないんだ。鳥というスタイル、眼、翔ぶこと

——それも愛鳥家になるのかしら

——どうかな。たぶん、ちがうと思うよ

X氏は、女の左側に腰を掛けたため、左手でビールを注ぐ形となった。女の眼が、X氏の手の傷あとに触れるが、視線には、もう、看護婦の観察の気配は含まれていない。ただの女の眼だ。

左手の甲が痒くなった。いや、気分がするだけか、痛みが軽く走ったのか、判別はできないが、手の甲がひりひりしたことは事実だ。女は、自分は猫派だと言い、鯖や鰯や鯨を食べ、ビールを2本のんだ。X氏は、生酒を5本のみ、冷奴、生野菜、焼鳥を食べた。10時だった。X氏は、楽しい一夜だったと女に言った。女は、雨がやんで、青空が現れたら、日曜日に、海へ行かない、と誘った。X氏は頷いた。永遠に雨はやむことがあるまいと思いつつ、そのプランもなかなか素敵だが、約束として、ひとつだけ自分の願いもきいてもらえないかと言った。店を出て、路上の駐車場がある暗闇に差しかった時だった。女の唇が動く気配がした。

X氏は、痒い左手を女の眼の前に差し出した。

——手の甲にキスしてくれませんか

女が笑ったのか、ただ頬が痙攣しただけなのか、X氏にはわからなかった。いや、闇のなかで、